



衣川 正作

## 渡来人いずこより 『火箸を作れて一人前』

この仕事に就いた昭和43年、主力の商品はフラッシュバット溶接のアンカーチェーンでしたが、まだ鍛接鎖も作れる設備が一部残っていました。古くからの職人さんもおられ、その一人が『火箸を作れて一人前』と若者達によく言っていました。加熱した鉄を扱う仕事なので、火箸がまるで指先のように自由自在に動く必要があります。加工する材料の太さに応じた先端部の丸み、角度、火箸の握り具合、一人で数本の火箸を自分で作り、自由に操れるように修理・修復し大切に使っていました。人によって、握力も異なり作業中の火箸の握り加減が異なるもので、自分に最適の火箸は自分で作るしかないのです。熟練の職人さん達が操る火箸はまるで、彼の手のように動きます。加熱された丸棒（約1000℃）を扱うには火箸が重要な役割をします。

古墳からの出土品の中に、火箸（鉄鉗：かなはし）や鍛冶屋の工具が含まれていることがあります。日本よりもずっと金属加工が進んでいた当時の朝鮮半島ではどこでも普及していた鍛冶技術ですが、工具を副葬するのは非常に限られた地域です。新羅の領域に多く分布し、副葬は新羅的な習俗だったのでしょう。なお、鍛冶工具副葬古墳には皇南大塚北墳（慶尚北道慶州市）のように王陵級の古墳がある一方で、土器や少量の鉄器しか持たないような小さな墓もあります。前者は鉄器生産を統括する上位階層、後者は実際に鍛冶に関わった工人の埋葬習俗と推定されます。

日本列島でも、鍛冶工具の副葬は5世紀以降に見られ、首長級の墓に副葬される一方で小型古墳にもあります。このような習俗は、洛東江東岸の地域に多いと思われます。（画像2）は古墳からの出土品ではなく工房で使われた鍛冶工具です。布留遺跡 残存長31.6 cm

現在、弊社の製造工程では、火箸の使い方が3通りあります。一人が一本の火箸を使う、一人で同じ寸法のものを2本使う、一人で異なった寸法のものを2本使う、などです。例えば江戸時代の針金づくりの絵では、横座が大きな先の平らな箸を使っています。

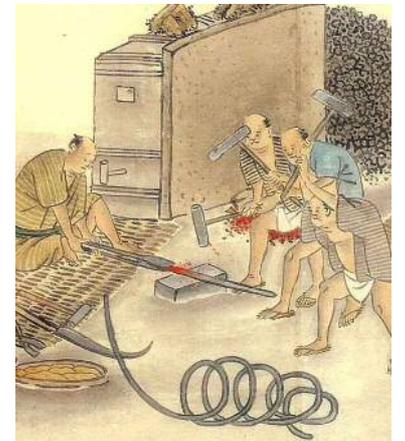
### 火箸



画像2 工房で使われた火箸



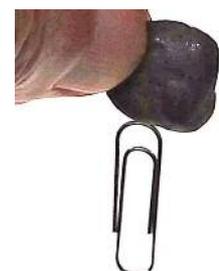
### 江戸時代 針金づくり



### 2本箸



### 『鉄のふしぎ博物館』



鍛冶屋用語		考古学用語		用途
火箸	ひばし	鉄鉗	かなはし	熱い鉄素材を挟む
金槌	かなづち	鉄槌	てっつい	叩く
鑿	たがね	鉄鑿	てつのみ	裁断と孔をあけ
火床	ほど	火窪	ほくぼ	鉄を加熱する炉
金床	かなとこ	☆金床	かなとこ	鉄を叩くときの台

☆金床、昔は大きな石を使用した例もある。

参考図書

特別展 渡来人いずこより 大阪歴史博物館 図録 2017.04.26

「先大津阿川村山砂鉄洗取之図」（財）JFE 21世紀財団 2004年7月1日

<http://www2.memenet.or.jp/kinugawa/ryou@memenet.or.jp>

来て！見て！ふれて！ ふしぎ体感